まえがき

シンジルト　SHINJILT

この報告書は、現代日本における人と野生動物（けもの）の関係のダイナミックスを、14名の大学生たちが自らの調査経験に基づいて描いたものです。社会調査実習の一環としてこれまで私は学生を引率して、人と野生動物との関係をめぐって、多良木町を含む南熊本地域おいてはすでに2回ほどフィールドワークを行っており、今回はその3回目になります。

これまでは調査実習報告書として『狩猟の民族誌：熊本南部における生業・社会・文化』（2015年。およびその発展バージョンである『狩猟の民族誌：南九州における生業・社会・文化』2016年）と『狩猟肉の民族誌：肉をつくる、肉がつなぐ、肉がつくる』（2018年）があります。前者においては、主に五木村での調査をベースに「生業」「社会」「文化」の3つの側面から狩猟という実践の全貌を浮き彫りにしてきました。後者においては、多良木町や湯前町そして水上村での調査を中心に、「狩猟肉」という存在に着目し、それが地域社会にいかなるインパクトをもたらしているかを検証しました。

上記の研究蓄積を踏まえ、特に多良木町におけるフィールワークを強化しながらまとめたのが、3冊目となるこの報告書です。学生たちは猟師たちとの交流の中で、狩猟という実践が、実践の片方の当事者である猟師の一方的なアプローチによるものではなく、むしろもう一方の当事者である野生動物との知恵比べや駆け引きの中ではじめて成り立つものである、という事実に気づきました。こうした人間中心主義的な視点では捉えきれない事実をいかに描き出すべきかということを意識し、構想されたのが、「動物のパースペクティブ」と題する第1部です。

「イノシシは薄情で危険な野生動物であり、犬は人間の伴侶であり家族である。ペットはペットであり、食材は食材であり、ペットは食材にはなりえない」。これこそ、動物をめぐる世間一般にみられる二項対立的な認識といえましょう。しかしながら、猟師たちの実践においてこうした認識は必ずしもそのまま通用するとは限りません。「イノシシが薄情になったのは近年のことであるかもしれません。犬は道具であったり、神であったりもします。仔イノシシはペットであると同時にジビエにもなりうるのです」。これこそ、猟師たちの動物観の表れです。いわゆる世間一般の人たちとの比較において、猟師たちのもつ動物観の特徴について論じているのは、第2部「人とけもののインターフェース」です。

それでは、第1部で取り上げた狩猟実践および第2部で論じた動物観の特徴は、いったいどのように生まれたのでしょうか。この問いに答えていくのは、第3部「猟師のイムポンダラビリア」です。第3部において、舞台は狩猟の現場から、狩猟実践を支える地域社会の日常生活に移ります。この部において着目しているのは、日常生活における猟師やその関係者たちのさまざまな体験、振る舞い、俗信といった、こまごまとした取るに足らないことです。それらに目を配ることで、猟師たちのおかれる社会の「不可量部分（イムポンダラビリア）」にアクセスし、それを描き出そうとしています。以上はこの社会調査実習報告書の概要です。

言うまでもなく、一口に社会調査実習といってもそのあり方は多様です。文化人類学を専門とする私にとって、社会調査実習のエッセンスは実際に人と接することにあります。その

ため、毎回、調査先の方々にはさまざまな形でご迷惑をおかけしています。とくに今回の調査実習は、新型コロナが完全に終息していない間に行われたため、受け入れ先の方々のご理解がなければきっと実現できなかったことでしょう。2021年3月に行った事前調査においても、9月に行った本調査においても、われわれ調査チーム一同をいつものように温かく受け入れてくれたのは、熊本県猟友会上球磨支部の多良木分会と水上分会のみなさんでした。

そうした猟師の方々を紹介していただき、彼らへのインタビューを調整していただいただけでなく、狩猟同行をも可能にしてくださったのは、熊本県猟友会上球磨支部事務局長の石田博文さんと熊本県猟友会上球磨支部多良木分会長の長田和男さんのお二人でした。さらに、本調査を終えてからまとめた調査実習報告書の草稿をインタビューに応じてくださった猟師の皆さんに読んでいただき、さまざまなご意見をいただきました。皆さんのご意見にすべてお応えすることができなかったかもしれませんが、皆さんとのやり取りの中で、学生たちはいっそう成長したことを私は実感しています。猟友会、役場、そして食肉業界などお世話になった方々に深くお礼を申し上げたいと存じます。誠にありがとうございました。

写真　調査チーム一同の宿泊先となるブルートレインにおける反省会
（多良木町、2021/09/23、ディリフ撮影）

2022年3月28日
熊本大学・文学部・教授